



羊たちのつづき

平成28年
5月号

発行：経済同志会シーブクラブ

三十五周年記念例会・懇親会

平成二十八年三月十七日木曜日。経済同志会シーブクラブ創立三十五周年記念例会が四十一名の現会員にご参集いただき、シーブクラブとは縁の深いアイトワにて開催されました。

野田初代会長、筒井第三代会長をはじめシーブクラブに関係があり故人となられた方々へ黙祷を捧げたのち、第二代松尾英機会長による開会の辞が声高らかに宣言され、記念例会の幕は切つて落とされました。



やっとこの日を無事に迎えることが出来たという思いと同時に、五年前の三十周年は嬉野の地で懇親会と宿泊を兼ねて開催するという初めての試みに挑戦し、賛否はともあれ記憶に残る周年企画だった。

たと思い返し、さらに遡って十周年は今回と同じアイトワにて開催し、会員全員お揃いのブレザーとネクタイに身を包む中、入会間もない私は司会の役を仰せつかり緊張の連続だった記憶は呼び起され、おもわず感慨に耽っていました。

三十五周年事業は牟田会長の発令の元、プロジェクトチームを編成し、池本リーダーを中心に総務委員会メンバーで構成され、企画・会議・運営・実行を任されています。今回は記念例会と記念旅行を分けてそれぞれ開催するという方向性は決定されており、昨年の七月結成以来PT会議を幾度となく開催してきました。本来ならば〇五周年事業はさほど派手にやらす、〇十周年時に



パーッとやるといのが世の常なのでしようが、クラブ内では本年度はのっぴきならぬ覚悟でやるべし！という啓示がどこからともなく感じ取られました。曰く、もうオイは四十周年の時にはおらんけん今回はキチツと締めたか。とかこれがオイのシーブでの最後の事業って思うとるけん、わかつとろうね。などというお言葉がご本人や口伝えで実しやかに聞こえてくるのでした。



過去の周年事業を紐解くと、それは錚々たる講師を招聘してクラブメンバーだけでなく会員企業関係者や一般市民をも呼び込んで開催し、佐世保にシーブクラブあり！と印象付けけるには大成功の企画の数々にあらためて圧倒されました。過去の周年事業に関わってこられたメンバーに敬服の念を感じずにはいられません。

じや三十五周年の目玉は何だ？とPT会議や自問すれどもなかなか答えを見いだせずにいる中、今回は外部に対してではなくシーブ内部の充実した式典としたいという意向が牟田会長やシーブ歴の長い方々より寄せられました。



ご存じのとおりシーブクラブとアメフェス（アメリカンフェスティバル）は切つても切り離せない関係にあります。その内容は先輩諸氏が記念誌等で随所に投稿されていますのでそちらを参考にさせていただきます。J.Cの経営開発委員会から派生した任意団体のシーブクラブが、佐世保市より委託されアメフェスのテナント班を管理することによってクラブの土台が名実ともに固められたと言つても過言ではないと思います。

今回、現在は会員ではないがその当時を知る、または一緒に汗を流したメンバーを三十五周年例会に呼んでどうかという意見が出てきました。そしてそれに賛同する意見がみるみる膨らんでいったのです。

PT会議や役員会を重ねながら慎重論、待望論、そもそも論等、百家争鳴の中、議事運営の難解さを噛みしめつつも前向きに捉えて行こう論で何とか意見の一致を見ました。

結果、元会員の十二名の方々から出席という回答をいただきました。式典として今回は、歴代会長の登壇回数を増やすべく役割を課しました。

歴代会長の紹介はもとより、開会宣言を松尾英機第二代会長。綱領唱和を木村公康第四代会長。三十五年のあゆみを本田福盛第五代会長。閉会宣言を第六代吉田勝美会長。乾杯発声を第七代西山秀樹会長。お開きのシーブ名物五本締めを中田博之第八代会長にそれぞれお願いしました。

量より質をとの声に耳を傾け会食の内容を見直しました。料理メニューを吟味し充実させるために酒類、飲み物は持ち込みとしました。結果、予想を随分と下回る酒類の消費量となりました。平均年齢の上昇に反比例し飲酒量は減少しているのだとの判別が容易になりました。この傾向は今後のクラブ



における宴会時の指針となるのではと確信します。

余興コーナーは特に設けませんでした。三十五周年のあゆみのスライドショーに若かりし頃の自他の姿に感慨深げに見入っている様子が印象的でした。またシーブ名物のメーデーボックスを挙行しました。元会員さん達全員を紹介するべく現在も親交のある現役メンバーとペアでお一人ずつ登壇していただきました。アルコールも入ったところで皆さん口も滑らかで予定時間を大幅に超過してしまふほど盛り上がりがありました。

あつという間に楽しい時間は中締めを迎えることとなり、シーブ名物五本締めを中田直前の音頭によって打ち、お開きとなりました。バス二台をチャーターして移動後の二次会も三十名を超える方々にご参加いただきました。

会を通してご迷惑をお掛けしたり至らない点等、多々あったかと存じますが、三十五PT・総務Wellibe委員会メンバー全員おもてなしの心でなんとか例会・懇親会を滞りなく開催することが出来ました。メンバーの皆さんのご協力に厚く感謝申し上げます。

複数の人間がいて酒があれば、場は自然と盛り上がり、時間も適度に過ぎてゆく。といった意見もあるでしょうが、シーブなりのだわりや切り口をもって考え、宴を盛り上げていく。

たかが宴会、されど宴会。こいがシーブたい。

総務 Wellibe 委員会

中村聰文

この一年

「シーブクラブ」入会一年を振り返って

法村輝也



前任の弊社・山田から引き継ぎ、「シーブクラブ」に入会し間もなく一年が経とうとしています。右も左も分からず、佐世保市内の地理も分からず、戸惑うばかりのスタートでした。はじめに「シーブクラブ」の規則に沿って、牟田会長と山口専務の面接を旧事務局（須田尾町）で受けたことを昨日のことに思い出されます。

面接日が事務局引越しを直前に控えた日程での面談。よって、最初の役割が事務局の「長崎新聞」の引越し手続きでした。「シーブクラブ」の活動が始まり、すぐに懇親会場で「ニックネーム」を江頭さんに付けていただきました。この「ニックネーム」に助けられ、入会直後に覚えていただく「きっかけ」となりました。江頭さんの温かさに、これから先も頭が上がりません。また、私にとって35周年の節目の年に入会できたことは幸運でした。中村委員長をはじめ、池本プロジェクト・リーダーや総務委員

会メンバーの皆さんにも恵まれ、委員会内の記念式典準備を通じて、「シーブクラブ」の歴史や運営の仕組みなどを学ぶことができました。山あり谷ありの準備でしたが、最後は総務委員会の結束の固さで乗り切れたと思います。この一年の中で、最も達成感を感じた活動でした。その他、オープン委員会や例会などを通じて、多くの「気付き」を与えてもらっています。経営者でもなく、ましてや佐世保出身でもない私にとって、シーブクラブの皆さんに、少しでも役立つことは何か、微力ながら何ができるのかを考えていくことが2年目からの課題です。

この一年は「縁」という言葉の意味と有難さを、あらためて知ることのできた一年でした。この「つぶやき」の紙面を通じて、皆さんの「出会い」に感謝申し上げます。そして、これからも引き続き、よろしくお願いいたします。

一月が過ぎました。熊本市内の中心部は外からの見た様子ではいつも通りの生活に戻ってきているように感じます。ただ行

震災関連

(熊本に居を構える濱村さん)



震災から一月が過ぎました。熊本市内の中心部は外からの見た様子ではいつも通りの生活に戻ってきているように感じます。ただ行

きつけのお店に赤紙が貼られていて休業しているのを確認した時はショックでした。熊本城も目の前にすると嘔然となってしまいました。物資は市内においては十分行き届いているみたいですが。ただ渋滞がかなりひどくなっています。熊本駅からのタクシー、路面電車はすごい数の人が並んでいます。インフラが復旧するまでこの状態が続くでしょう。



(ボランティアに奔走する須川さん)



熊本震災に対しての活動報告

まずは熊本震災に際し亡くなられた方に対し深くご冥福をお祈りします。私は現在九州管区の40歳以下の部の青年会会長をお引き受けさせていただいている立場から震災の翌々日より物資を持って熊本入りを目指しました。道路の渋滞を危惧し深夜1時に佐世保を出て熊本へ向かいましたが、すでに5時の

<大慈寺の被害と佐世保より輸送した物資>

時点で植木インター出口から熊本市へ向かう道路は物資搬入の大型トラックで大変な渋滞でした。市内においては安全確認されておらず通行できない橋がいくつもあり、また地盤の沈下や隆起により道路所々に段差ができており、段差に気をつけながらの運転にて熊本の中心のお寺である大慈寺へ向かいました。



大慈寺には熊本県の青年会会員が集まっており、今後の復興支援等を検討し、まずは割れたガラスの片付け、危険箇所付近に近づかせないためのバリケードの設置、被災寺院に連絡し足りない物資の搬入を行いました。その後私が物資豊かな佐世保にて物資を熊本の寺院に代わって購入し、渋滞を避け深夜のうちに物資搬入する輸送役をお引き受けさせていただきました。その頃、全国曹洞宗青年部の会長、副会長が炊き出しの機材（かまど、プロパン、発電機、食料）を持って馳せ参じ、市内砂取小学校にて炊き出しを行いました。当時はおにぎり1つを避難者7名で



分けてくださいという状況であったため大変喜ばれました。口コミで情報が広まり2500食から500食さらには750食分と数が増えましたが無事全ての物資を使いきり帰られました。その炊き出し機材を受け継ぎ現在でも九州の青年会が



<御船カルチャーセンター炊き出し>

炊き出しを行っています。そもそも曹洞宗の炊き出しについては、阪神淡路大震災の際に寺へ避難してきた方々に対しお寺にて炊き出しをしたことに端を発します。その後北海道地震（奥尻島）、中越地震、東日本大震災と炊き出し活動を続け発展してまいりました。



現在熊本において帰る家のない被災者、家がある準被災者の選別と避難所の統合合併がすすんでおります。炊き出しについては食中毒、ノロウイルス、季節外れのインフルエンザなど衛生状態は依然として厳しい状況ですが、各員気をつけて炊き出しを続けていきたいと思っております。ご支援ご協力よろしくお願いいたします。